

令和 2 年 5 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13677

研究課題名(和文)自由なき状況下の自由主義：非英米圏における自由主義の展開

研究課題名(英文)Liberalism without liberty: Developments of non-Anglophone liberalism

研究代表者

千野 貴裕 (Chino, Takahiro)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・専任講師

研究者番号：00732637

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、しばしばわれわれが暗黙に前提としている英米型の自由主義とは異なる自由主義の系譜を、20世紀前半(1920-40年代)の日本とイタリアの文脈を事例として検討した。日本の思想家としては、いわゆる京都学派(とその影響を受けた思想家たち)を取り上げた(西田幾多郎、田辺元、中井正一、戸坂潤、三木清、花田清輝、林達夫ら)。イタリアの思想家としては、クローチェ、モスカ、ゴベッティ、サルヴェミニらを取り上げた。本研究の成果は、すでにその一部を英語論文や共著書で発表しているが、さらに、2020年度以降の海外でのワークショップを経て、英文雑誌特集号に論文を掲載する予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

私たちは自由主義を前提とした社会に生きている。言論の自由、結社の自由、思想信条の自由などがその自由主義の内容とされ、その自由の単位は個人である。しかし、本研究が扱った、20世紀前半の日本とイタリアの思想家たちの書いたものを読むと、必ずしもそうした意味で「自由主義」という言葉が使われていないようだった。この研究は、この問題をより掘り下げて検討することによって、われわれが現在生きている社会が前提としている自由主義という立場が、個人を前提とするものに限られない、より豊かな可能性を包含しているのではないかという問いを追求するものであった。

研究成果の概要(英文)：This project revisits another tradition of liberalism apart from that of an Anglophone model, by examining Japanese and Italian cases in the early 20th century (1920-40s, to be precise). The Japanese thinkers are represented by those from the so-called Kyoto School (and also those who influenced by them) such as Kitaro Nishida, Hajime Tanabe, Shoichi Nakai, Tosaka Jun, Kiyoshi Miki, Seiki Hanada, and Tatsuo Hayashi. The Italian side is represented by Benedetto Croce, Gaetano Mosca, and Piero Gobetti, and Giuseppe Salvemini. A part of this project already resulted in the publication of English journal article and book chapter. Further outcome will be made as a series of English journal articles based on workshops about this project in the near future (expected in 2020).

研究分野：政治思想史

キーワード：政治思想史 イタリア政治思想 日本政治思想 グローバル政治思想史 自由主義

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

#### (1) グローバル政治思想史の観点

研究代表者は、これまで主として19-20世紀のイタリア政治思想史を研究してきた。博士論文では、現代の社会科学に大きな足跡を残しつつも、断片的にのみ研究されてきてアントニオ・グラムシ(1891-1937)の政治思想を包括的に研究した。英国ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンに提出した博士論文は今後の国際的なグラムシ研究の基盤となるものと高く評価され、最優等成績にて博士号を取得した。このグラムシ研究(とより広くイタリア政治思想史研究)を進める中で、いくつかの疑問をもった。第一の疑問は、政治思想史の研究は、人物や一国史的な研究に偏り、動的で広い視野を欠く傾向にないだろうか、というものである。この疑問から、「西洋対東洋」といったステレオタイプの文明論を避けつつ、国や地域を超えた思想家間の影響関係や、概念や思想的立場が世界的にどう伝播していったか、といった問いを明らかにする研究の必要性に気づいた。こうした研究(グローバル思想史 Global intellectual history と呼ばれる)は、近年英米で盛んであるが、言語的バリエーションや別の文脈に対する理解の欠如などがハードルとなり、さほど重要な成果に結実しているとは思えなかった。イタリア思想史を研究する日本の研究者として、英語圏の研究成果を後追いするのではなく、積極的にそれに参入していく余地があると考えられた。本研究は、20世紀前半のイタリアと日本における自由主義の研究であるが、これは上述したグローバル政治思想史研究のひとつの具体例である。

#### (2) 英米型自由主義と秘教型自由主義

第二の疑問は、自由主義に関するものである。自由主義は現代社会を形作る重要な思想潮流として、盛んに研究されてきた。しかしその大多数は英米型の自由主義に関する研究ではなかっただろうか。言論の自由、思想信条の自由、結社の自由といった、英米型自由主義は個人を単位とした自由の漸次的拡張を含意する。こうした観点からすれば、1920-40年代のイタリアや日本における自由主義は失敗しており、ファシズムの台頭に抗い得なかったと評価される。しかしながら、1920-40年代の日本とイタリアにおける自由主義は本当に失敗だったのだろうか。英米型自由主義の含意する個人的自由が剥奪された状況においても、例えば著者と特定の読者のみが共有しうるような、過去のある状況と現在の状況のアナロジーを用いることによって、表面上は古物愛好的に見えるテーマを論じていても、実際は現在の状況を批判的に考察しているということはあるのではないか。こうした自由なき状況においてなお自由を担保しようとするあり方を、「秘教的自由主義」と名付けた上で、同時代の日本とイタリアの思想家たちがもった自由主義のあり方の仮説として提示できると考えた。

### 2. 研究の目的

上述したことを踏まえて、本研究は、英米型自由主義とは異なる自由主義のあり方を、20世紀前半(1920-40年代)のイタリアと日本を事例として、研究することを目的とした。具体的には、それぞれの文脈における主要な思想家を取り上げ、彼らのもつ自由主義観を比較検討していくことがその内容である。

このことによって、われわれがその社会の基礎とする自由主義に対する英米型中心の見方を刷新することができると考えられた。言い換えれば、20世紀の前半のイタリアと日本を事例に、個人を単位とする英米型自由主義とは異なった自由主義の伝統を見出すことによって、現代のわれわれがもつ自由主義観をより豊かにすることができると考えられた。以上が本研究の目的である。

### 3. 研究の方法

上に述べた時期のイタリアと日本を代表する思想家を取り上げ、個々にその自由主義理解の特徴を考察した。日本においては、石橋湛山、清沢淵、長谷川如是閑といったジャーナリストたち、また西田幾多郎、田辺元、中井正一、三木清、戸坂潤、林達夫、花田清輝といったいわゆる京都学派とその周辺にいた人物を取り上げた(なお、取り上げることを予定していた河合栄治郎については、資料の一部が入手できず、京都学派によりフォーカスを合わせることにした。また、研究の進展のなかで、蠟山政道や矢内原忠雄についてもさらなる検討が必要であると思われた。この点は今後の課題としたい)。

イタリアにおいては、クローチェ、ゴッベッティ、モスカ、サルヴェーミニといったいずれも自由主義の立場に立つ点では共通しているものの、その自由主義はそれぞれ大きく異なる人物を取り上げた。また、その批判者としてグラムシとジェンティーレについても研究を行った。

先述した通り、研究代表者は主としてイタリア政治思想史を専門としてきたため、日本政治思想史については専門としていなかったことに若干の不安を感じていた。そこで、同様に別の専門を持ちながら、日本政治思想史に関心をお持ちだった乙部延剛・茨城大学准教授(当時)と相談し、様々な専門をもちつつ同じ関心をもつ研究者を集め、2017年度に「日本思想史研究会」を立ち上げ、現在に至るまで継続して活動している。研究会では、当初より二つの点を共有して研究を行ってきた。まず第一に、「日本思想史」と銘打ちつつもグローバル政治思想史に対する関心を共有している。つまり、日本のことやある特定の国(私の場合イタリア)のみをフィールドとするのではなく、19世紀あるいは20世紀のグローバルな思想的展開の中に、日本思想史を位置付けようとしてきた。次に述べるように、グローバル思想史に対する関心は、

海外でも近年急速に高まってきており、中国朝鮮や西洋諸国との関係のなかで展開されてきた日本思想史は、このグローバル思想史の研究動向と相性がいいと考えられた。第二に、英語での研究成果を志向することである。私は、海外で研究活動が続ける中で、日本の政治思想史研究の水準の高さと、そのプレゼンスの低さを同時に感じるが多かった。本研究のテーマを含むグローバル政治思想史は、海外からの関心も高く、こちらから英語で研究成果を発信することが求められている。本研究は、当初よりこうした状況を念頭に、海外でのワークショップ開催と研究ネットワーク作り、海外ジャーナルへの投稿や特集号の企画を企図して行われてきた。

#### 4. 研究成果

##### (1) 日本の思想家について

日本の思想家たち（自由主義的ジャーナリストたちと、いわゆる「京都学派」とその周辺に位置する思想家や批評家たち）については、以下の研究を通じて理解を深めることができた。第一に、テキストの詳細な分析である。日本語だけでなく、英語、独語、伊語の翻訳によって該当するテキストを検討した。京都学派の一部については、海外でも関心が持たれており、一部に不十分さがあるものの、テキストの英訳・英語での解説が存在すること、また独訳・独語での解説は一部で英語圏以上の水準を備えていることが分かった。しかし、本研究の分析を通じて、上記した外国語の翻訳や解説は、質量ともに20世紀前半の日本思想史の姿を伝えるには不十分であると言わざるを得ない状況であることが分かった。

第二に、本研究期間のあいだ定期的に開催した「日本思想史研究会」において、メンバーの報告と議論を通じて理解を深めることができた。同研究会では、上記した海外の日本思想史の研究状況に関する認識を共有した上で、海外でワークショップを企画し、積極的に20世紀前半の日本思想史について発表していくことが企画された。具体的には、海外でも一定の関心を集めている京都学派の思想に焦点を絞った上で、2019年3月にはベルギーのカトリック・ルーヴァン大学で、また2020年3月メドに、American Asian Society、英国ケンブリッジ大学でのパネルあるいはワークショップを企画していたものの、ともに、本研究代表者や他参加予定者のライフタイムイベントにより開催することができなかつた（なお、これらのワークショップ開催のために予定していた出張費は、関連書籍（消耗品）の購入に充てることができた）。そのため、2021年度に企画しなおすことを予定していたものの、新型コロナウイルスの世界的流行により、本報告書作成時点では開催時期は未定のままである。引き続き、海外ワークショップの開催と、それを元にした英文雑誌の特集号を企画する計画を進めていく。

##### (2) イタリアの思想家について

イタリアの思想家たちの位置付けについては、以下の研究を通じて理解を深めることができた。第一に、早稲田大学国際部からの出張費助成により、2018年3月にアメリカ・カリフォルニア州に出張し、同州立大学のイタリア思想史の研究者とイタリア文学の研究者と、20世紀前半のイタリア思想のグローバルな位置付けについて議論し、国際シンポジウムの企画について打ち合わせた（この出張費が助成された分、本研究予算を関連書籍（消耗品）の購入に充てることができた）。この国際シンポジウムについては、より詳細なテーマ設定、参加者の選定、予算の獲得、場所の選択などの議論が今のところまとまらず、開催の至っていないが、継続して可能性を模索している。第二に、同時代を代表する観念論的自由主義者として著名なクロウチェだけでなく、モスカ、サルヴェーミニ、ゴベッティといったそれぞれに独特な自由主義思想家の自由主義論の特徴を検討することができた。なかでも、ファシズムの台頭に伴って、モスカの議会主義に対する態度が変容したこと（議会主義の批判から条件付きの肯定へ）は興味深く、別途モスカの議会主義論として研究する必要を確認できた。第三に、これらイタリア自由主義の多様性が明らかになるにつれ、自由主義の批判者たちに対する理解も深まった。とりわけ、研究代表者が博士論文で取り組んだグラムシの自由主義批判の意図はより良く理解され、今までの理解に一部修正が必要であることも明らかになった。この研究成果は、以下(3)で紹介する二つの論文に組み込まれている。

研究代表者は、すでに2017年に *Journal of World Philosophies* 誌にグラムシと戸坂潤を比較する論文（査読付き）を掲載した。本研究期間中に、この論文を読んでもらった複数の方から数通のメールを頂いた。方法に対する厳しい批判もあったが、ある思想潮流の世界的伝播やその土着化のあり方を検討するといった、研究代表者のグローバル思想史研究の方向性には概ね好意的な意見をもらうことができた。今後、この方向性を本研究にも適用し、日伊の自由主義的ジャーナリストたちの自由主義理解や、日伊の近代批判者たちの自由主義理解を比較検討し、*Global Intellectual History* 誌や *History of Ideas* 誌に投稿する予定である。なお、*History of Political Thought* 誌には本研究テーマに関する論文を一本投稿したが、残念ながら不掲載となったため、別の雑誌に再投稿中である。

##### (3) 本研究により現時点で出版された論文

本研究の具体的成果として、本報告書の作成時点で刊行された論文は以下の通りである。

Chino, Takahiro (2020) 'Gramsci's critique of Croce on the Catholic Church', *History of European Ideas*, 46(2): pp. 175-189 (査読付き) .

英語圏の政治思想研究分野で重要なジャーナルである *History of European Ideas* 誌に論文が掲載されたことは、重要な成果であると自負している。今後も、本研究の具体的成果として、英文での論文発表を企画している（英文雑誌に本研究のテーマで特集号を企画し、そこに論文を掲載する企画）。

なお、英文の論文執筆に際して予定していた英文校正費用に関しては、新設された早稲田大学の英文校正費用助成金を2018年度と2019年度に獲得し、使用することができた。これに予定していた費用も、研究関連書籍（消耗品）の購入に充てることが出来たため、テキストの分析を中心とする本研究は予定以上に広い範囲の研究対象を扱うことができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Chino Takahiro	4. 巻 46
2. 論文標題 Gramsci 's Critique of Croce on the Catholic Church	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 History of European Ideas	6. 最初と最後の頁 175-189
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/01916599.2019.1653352	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----